

4月26日から28日まで中国武漢市において、『中国中部投資貿易博覧会』が開催されました。人口約3億7千万を有する中国中部地域最大の博覧会であり、公表された成約額だけでも日本円で5兆6千億円を超える盛況ぶりでした。

博覧会のメインイベントとして「持続可能な発展」をテーマに市長フォーラムが開催されました。フォーラムは武漢広播テレビ局31階の大型スタジオで行われ、終了まで、なんと7時間にわたり中部地域に生中継で放映されました。

現在、中国では、急激な経済発展を遂げる中で「資源節約型」と「地球環境にやさしい」社会を築くことが最重点課題となっています。フォーラムでは、日本、アイスランド、アメリカ、オランダ、ドイツ、ニュージーランドから9都市の首長と中国中部6省の省都首長が環境に対する取り組みを発表しました。

釘宮市長は、大分市の「地球温暖化対策市民会議」や「ごみ分別収集の取り組み」、「ギネスに挑戦」や「みんなの森づくり事業」について映像等を交えながら紹介をしました。

武漢市民を最も驚かせたのは、市長自らがごみを拾って歩いているということでした。「大分市の取り組みは、わかりやすく、自分たち一人一人がちょっとした手間をかけることで地球環境の保全につながることを気づかせてくれた。自分たちができることから環境保護をしていきたい」というコメントが非常に印象的でした。

地球環境の取り組みは、決して行政だけで解決できるものでなければ、一市、一国だけの範囲にとどまる問題でもありません。市民と行政とのパートナーシップという大分市発のメッセージが武漢の人々に確実に伝わったようでした。このパートナーシップの輪が、今後、中国そして世界に広がり、美しい地球の一助ともなればと胸を膨らませながら友好都市を後にしました。

【写真：(上)博覧会に出展した大分市ブース、
(中)市長フォーラムで発表する釘宮市長、
(下)参加都市の首長と】

